

ペゴニア株腐病（新称）の発生について

1 発生の経緯

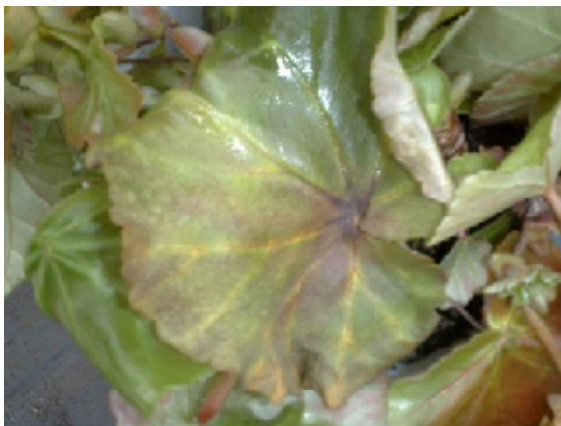
平成17年8月、エラチオールペゴニアの茎葉に腐敗症状を生じる病害が発生した。宮城県農業・園芸総合研究所園芸環境部で病徴部分から菌を分離し、(独)農業生物資源研究所に遺伝子解析を依頼したところ、*Fusarium foetens* であることが判明した。本菌によるペゴニアの病害は日本では報告されておらず、新病害であることが明らかになった。

2 発生状況

- (1) 発生作物 エラチオールペゴニア
 (2) 病害名 ペゴニア株腐病(新称)
 病原菌 *Fusarium foetens*

3 本病の病徴及び伝染経路

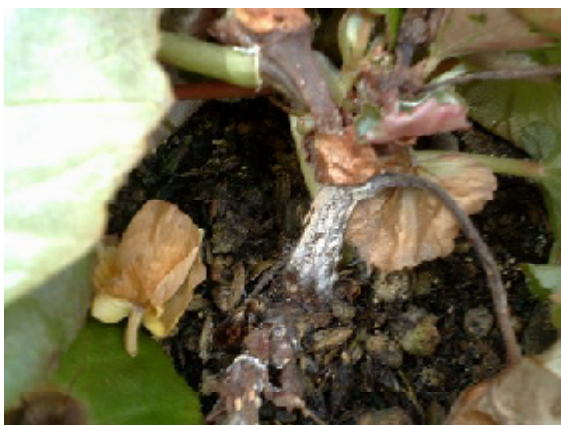
- (1) 葉でははじめ葉脈沿いに黄化が見られ、やがて葉柄基部から葉縁に向かって褐変を生じ、次第に拡大し、葉枯れ症状を呈する。湿度の高いときには水浸状の葉腐れ症状も認められる。
 (2) 葉柄と茎には褐変腐敗症状が認められ、最終的には枯死に至る。
 (3) 灰色かび病、茎腐病に類似する症状を呈するが、根にも褐変腐敗症状があることや地際部の導管も褐変することから区別できる。多湿時には腐敗部分に多量の分生子塊を形成する。
 (4) 本菌は土壌伝染すると考えられている。
 (5) 現在までのところ、本菌による病害の発生は、海外においてもペゴニア以外では確認されていない。
 (6) 海外の論文によると、接種試験により球根ペゴニア、冬咲きペゴニアにも病徴が見られるが、エラチオールペゴニアよりも症状は軽い。ペゴニアセンパフローレンス、木立ペゴニア、レックスペゴニアについては病徴は確認されていない。



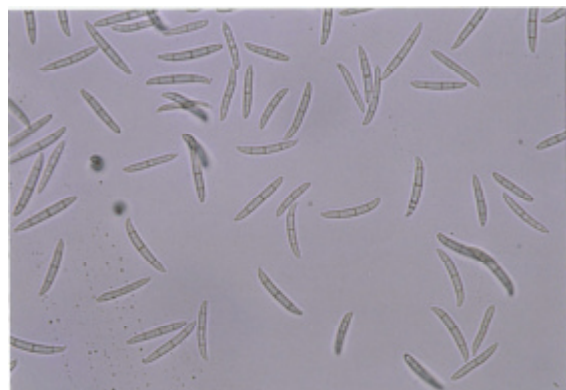
葉の初期症状(葉脈に沿った黄化)



株の症状(葉の黄化, 褐変, 葉枯れ)



地際部の腐敗症状と分生子塊



分生子塊上の大型分生子

(写真提供: 宮城県農業・園芸総合研究所園芸環境部)

4 防除対策

- (1) 発病株は見つけ次第ほ場外に持ち出し、焼却するなど適切に処分する。
 (2) 土壌伝染が考えられることから鉢土についてもほ場外で適切に処分し再利用はしない。